

# 母子保健と医療機関

—モデル地区の妊産婦、乳幼児受診状況から—

伊藤 玲子\* 石塚 志津子\* 足立 冬子\*  
大曲保健所保健婦  
神岡町保健婦

## I はじめに

母子保健管理として、医療機関との連携は、常に指摘されているところであるが、実施にあたり、どのような隘路があるのか、モデル町の妊婦、乳児、3才児の上からその受診状況を調査した。

## II 調査方法

昭和37年より、神岡町をモデル町として選定し、健診業務を中心としながら、市町村母子保健管理システム<sup>1),2)</sup>のあり方を調査研究している。この町の48～50年の3カ年における妊婦259名、乳児263名、3才児237名について、母子健康手帳、国保被保険者の診療報酬明細書（以下国保レセプト）、健康診断、育児相談等の問診を通して得られた中から、受診医療機関の範囲について調査した。

## III 神岡町の概略

神岡町は、県中央部大曲保健所管内（1市5町4村）に属し、人口6,800人、30部落、1584世帯の平地農村地帯である。昭和30年旧神宮寺町と北檜岡村の合併により誕生した。人口は減少傾向で、県内でも過疎地区の範囲に入っている。

年間出生80名前後で、乳児死亡は、41年はじめて0となり、その後は表1に示す如く、0または2～3名で、早くから県内でも地区に密着した母子保健活動の熱心な町であり、47年より住民サイドの地区組織活動も芽ばえ、行なわれつゝあるところである。

衛生関係は、これまで住民課の中にあっただが、昭和48年半ば保健課として独立し、課長、係長、保健婦3名、事務員3名、嘱託助産婦3名となった。

医療機関としては、町在住医2名（一般内科、外科）歯科医2名である。

表1. 出生、死亡、乳児死亡、新生児死亡年次推移（昭和44年～49年）神岡町

事 項	年 次	実 数						率（人口1,000対）					
		44年	45年	46年	47年	48年	49年	44年	45年	46年	47年	48年	49年
出 生	生	86	86	89	79	85	78	12.2	12.4	12.4	11.4	12.4	11.4
死 亡	亡	50	47	50	46	47	50	7.1	6.7	6.9	6.6	6.9	7.3
乳 児 死 亡		2				3		23.3				36.1	
新 生 児 死 亡		1				* 3		20.0				36.1	

\*未熟児 当日死亡  
未熟児 当日死亡  
未熟児 21日目死亡

## IV 成 績

### A. 妊娠中の医療機関

図1は259名の妊娠中の受診医療機関を、母子健康手帳から調査したものである。神岡町在住医は、内科1、

外科1、歯科2であり、妊婦は、72.1%が大曲市（バス15分）の7医療機関に通院しており、そのほか、秋田市（7カ所）、横手（2カ所）、西仙北町（1カ所）等6市町村13カ所の医療機関におよび、さらに県外9カ所と広がっている。

\*秋田県衛生科学研究所

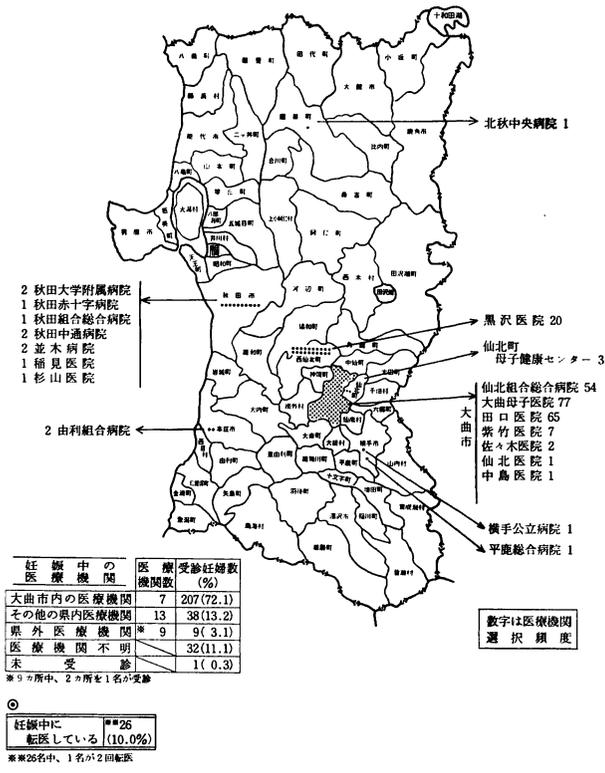


図1. 神岡町妊娠中の医療機関（昭和48.49.50.259名）  
母子手帳から

なお、妊娠中に2カ所以上の医療機関に受診している者が、26名（10.0%）、未受診が48年に1名（助産婦の相談をうける）で、32名（11.1%）が医療機関不明である。

また、妊娠中の受診状況を、妊娠月数、受診回数の上からみると、表2の如くで、初診は4カ月まではほぼ全員が受けており、6～7カ月に至って月2～3回の受診者が少数ながら出てきている。9～10カ月で必ずしも全員が頻回に受診しているわけではない。

妊娠中の異常を、妊婦医療機関方式としての行政的な受診と、妊婦自からの受診もあわせた所見を比較してみると表3のとおりである。すなわち、行政的に行なわれている受診券からは、異常者として、前期で227名中16名（7.0%）、後期で186名中28名（15.1%）であるに比し、自からの受診も加えると、前期で259名中43名（16.6%）、後期で259名中153名（59.1%）で、前者のみでは、その把握は、極めて少ないことがわかる。

表2. 妊娠中の受診状況（昭和48.49.50年）神岡町

事項 月数	初回 受診	受 診 回 数						
		1回	2回	3回	4回	5回	6回	7回
1カ月	1	1						
2カ月	48	47			1			
3カ月	63	80	1					
4カ月	76	134	3				1	
5カ月	47	188	11					
6カ月	8	188	14	1				
7カ月	5	180	33	3	1			
8カ月	3	138	75	8	3			
9カ月		98	87	40	5	1		
10カ月	1	41	61	56	46	15	9	3
初診不明	6	6						
未受診	1							
計		* 259						

\* 昭和48年。乳児健診受診の母親を対象とする。

表3. 妊娠中の異常（昭和48.49.50年）  
神岡町 妊婦総数259名

事項	医療機関受診券から 前期後期 受診数	医療機関受診券から		母子健康手帳から	
		前期	後期	前期	後期
貧血		9	18	28	74
浮腫		2	2		
糖尿		1		1	3
蛋白尿		2	2	5	6
高血圧				4	2
高血圧+貧血		1			
妊娠中毒症			3		57
妊娠中毒症+貧血		1			6
妊娠貧血+膀胱炎			1		
膀胱炎				1	
異常出血					1

切迫流産の疑				4
前置胎盤の疑				1
頸管ポリープ+貧血				1
骨盤位				2
その他			2	
計	16(7.0)	28(15.1)	43(18.3)	153(59.1)

( ) %

### B. 出産場所

妊娠中と同様、259名の母子健康手帳からの調査であるが、図2の如く、大曲市内医療機関6カ所に80.3%と集中している。ほかに、県内では秋田市をはじめ、7市町13カ所、県外7カ所と広がっている。このうち、妊娠中と同じ医療機関で出産している者は191名(73.7%)、異なるところの者32名(12.4%)、自宅分娩4名(1.5%)である。

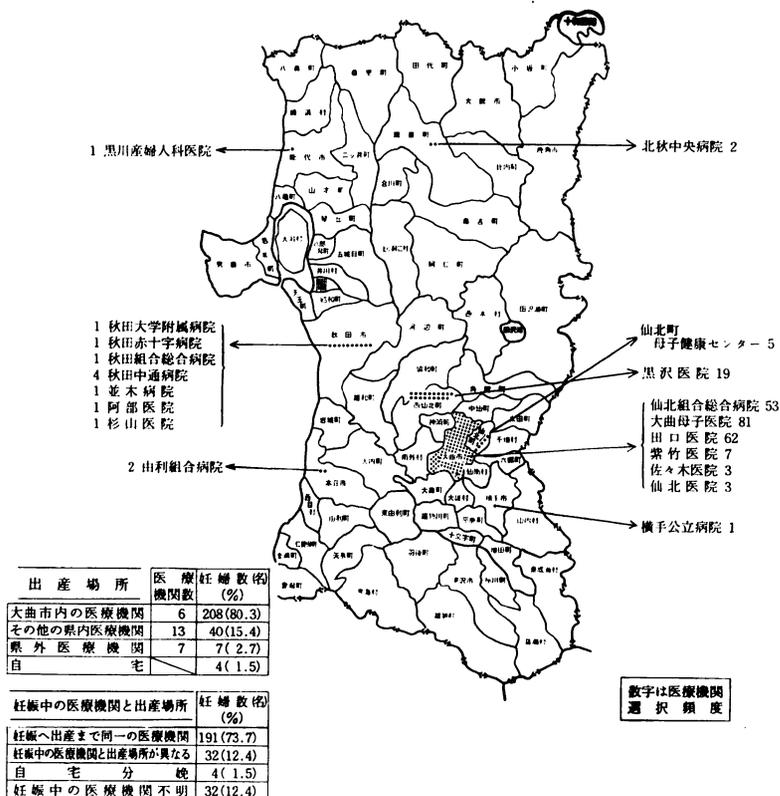


図2. 神岡町出産場所（昭和48.49.50.259名）  
母子健康手帳から

### C. 乳児受診医療機関

図3は、乳児263名の受診医療機関を、国保レセプト、ならびに乳児健診時の問診から調査したものである。乳児の48～50年国保世帯受診者は263名中80名(30.4%)で、92名のその他の世帯の対象児について、問診からの情報もあわせると、乳児は地もとおよび大曲市の20カ所の医療機関に通院しており、ほかに秋田市、横手

市、西仙北町等6市町村13カ所、および県外3カ所にあつている。

263名の延受診回数をみると、地もとおよび大曲市内が538回中473回(87.9%)、その他の県内51回(9.5%)、県外3回(0.6%)、医療機関不明11回(2.0%)となっている。(なおこの場合の1回は、レセプト1枚あるいは問診による1疾病とした。)

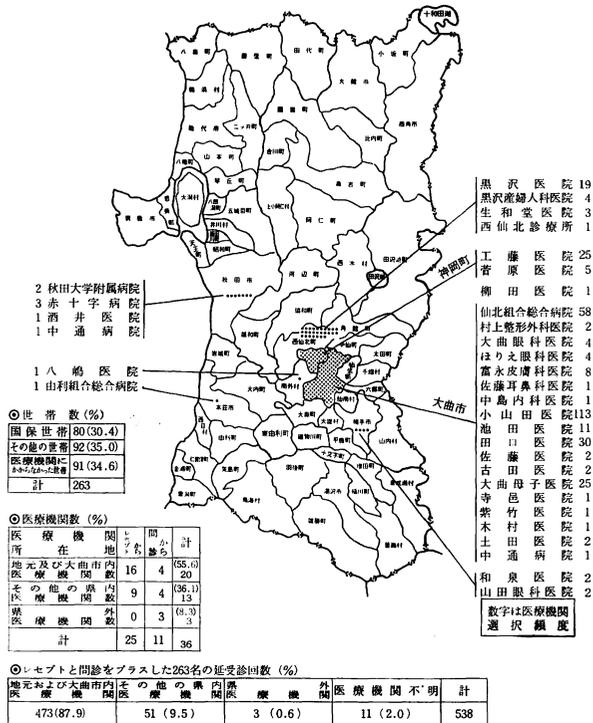


図3. 神岡町乳児受診医療機関(昭和48.49.50.263名)  
レセプト、問診から

### D. 3才児受診医療機関

図4は、3才児237名の受診医療機関を、国保レセプトならびに健診時の問診から調査したものである。48～50年の3才児受診国保世帯は75名(31.6%)、その他の受診世帯18名(7.6%)で、その医療機関分布は、地もとおよび大曲市の21カ所、秋田市、横手市等の県内4

市町村8カ所、県外1カ所である。

乳児と同様237名の3才児延受診回数の上からみると、地もとおよび大曲市が227回中193回(85.0%)、その他の県内医療機関23回(10.1%)、県外1回(0.4%)、医療機関不明10回(4.4%)である。

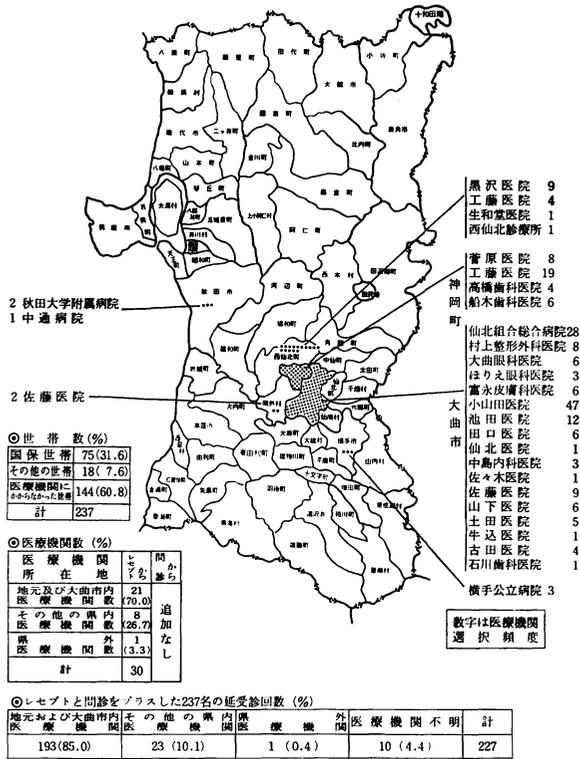


図4. 神岡町3才児，受診医療機関（昭和48.49.50.237名）  
レセプト，問診から

## V 考 案

以上神岡町の実態を，昭和48，49，50年の妊婦，乳児，3才児と，その受診医療機関の状況についてのべた。医療機関との連けいは，その目的，地域の実情によりそのあり方は異なると思われる。しかし，年間出生80～90名程度の神岡町のみ受診医療機関の実態をみてもわかるように，受診者の行動範囲は思いのほか広く，その連けいの方法は，實際上，決して容易なものではない。例えば，妊娠中の医療機関と出産場所が異なる者が12.4%で，この中には，健診をうけながらも母子健康手帳の不備が重なると，飛び込みのケースとなることも想定される。乳児の受診状況からみても，同一疾患での転医も少なくなく，こうした実際面のあり方を，どうしたらよいか，住民と医療機関両面よりの検討がなされなければならない。

50年度，全州市町村母子保健事業実態調査<sup>3)</sup>から，行政的に医療機関との連けいが具体的にみられたのは，妊婦医療機関方式（69市町村）のほか，妊娠中毒症連絡票をうけている（4町），出生，退院の連絡をうけている（3町）である。

また集団健診では，0～3才の健診参加医は小児科53名，内科小児科40名，その他の専科98名である。50年度乳児健診総回数1,036回に対し，医師の参加延人員は1,236名であり，3才児の330回に対し，医師延人員405名である。

本県には，半径4kmに医師不在の，いわゆる無医地区<sup>4)</sup>は，67カ所あり，県内医師数は1,192名である。このうち40.5%が秋田市に集中している。また，産婦人科医135名，このうち秋田市28.9%，小児科医47名，このうち秋田市59.6%であり，全般に秋田市および県南に比し，県北が医師不在の地区が多い。

徳丸氏<sup>5)</sup>が，ここに1人の又は集団の子ども（\*母親）の健康管理を考えたとき，最も長く，最も濃く関与するのは，第一線の開業小児科医（\*産科医）であろう，といわれるように，地域の医師の連けいを考えずして成立たず，特に母子保健の特異性より，この点は，より強調されるところである。そして現場の担い手として，現実

に重要な役割を果してきているのである。（\*著者追加）  
本県においても，医療は勿論，前記の健康診断のほか，予防接種，救急医療に多くの医師の参加を得ており，近年は地域保健活動として，健康管理への積極的ア

ブローチが進められている。本県母子保健対策としても、実際に行なわれている状況をふまえ、これを有効に発展させていくためのシステム化を計り、徳丸氏のいわゆるフィードバックがなされるようにしていきたいものである。つまり、活動の結果が評価され、その情報が立案に運用に反映され、調整され、この動きが反復され、第一線を安定活動に導くようなしくみを確立することである。行政と、たづさわの人々の歩みよりと、協力を期待してやまない。

## Ⅵ む す び

モデル地区神岡町3カ年の妊婦259名、乳児263名、3才児237名の受診医療機関との関連について、母子健康手帳、国民健康保険レセプト、健康診断を通して、実態調査を行なった。その結果、出生80名程度の地域においても、受診医療機関の範囲は広く、母子保健対策としての医療機関との掛けいを、その地域により、いかにシステム化していくか、今後の課題としたい。

## 文 献

- 1) 伊藤玲子たち：秋田県母子保健管理の実際と問題点（モデル地区神岡町の状況）、秋田県衛生科学研究所報、No.18（1973）
- 2) 伊藤玲子たち：妊婦、乳幼児健診、保健指導のあり方（母子保健管理システムにおける健診、保健指導のあり方）、厚生省心身障害研究班報告、昭49
- 3) 伊藤玲子たち：秋田市町村母子保健事業の実態について、（主として健診事業を中心に）50年度調査、厚生省心身障害研究班報告、昭50
- 4) 秋田県環境保健部医務薬事課調：昭48.5.10
- 5) 徳丸 実：第一線予防小児科の展開、小児保健研究 1～9、VOL35、No.1（1976）